

第1回 尼崎市総合計画審議会 専門部会 議事録

日時	令和3年2月5日(火) 18:30~
開催手法	WEB会議
出席委員	青田委員、稲垣委員、梅谷委員、加藤委員、川中委員、花田委員、久委員、堀田委員、室崎委員、小坂委員、堂園委員、松原委員、勇委員、中西委員、仁保委員、古川委員
欠席委員	瀧川委員、武本委員、八木委員
事務局	塚本総合政策局長、中川政策部長、橋本都市政策課長、都市政策課職員

1. 開会

- 資料の確認
- 議事録署名委員の指名

2. 有識・議員部会及び市民部会の検討結果について（報告）

（事務局）

<資料第1号「有識・議員部会及び市民部会の検討結果について」（以下、「資料第1号」という。）>に基づき説明。

（部会長）

まず、市民委員の方からご意見等がございましたらお願い致します。

（委員）

市民委員の皆さんには、短い期間にもかかわらず集中的にご参加いただきありがとうございました。また、今回の専門部会についても、ご参加いただき感謝申し上げます。

市民部会での検討結果については事務局からご報告いただいた通りですが、市民部会では、その「尼崎らしさ」の言葉が出た時の文脈や、なぜその言葉を選んだのかというエピソードが市民委員の方々から披露されました。その際、「それって尼らしいよね」という会話になったのですが、その言葉だけ捉えると、どの都市でもあげられるようなものになってしまいます。抽象度を上げればどうしてもそうになってしまいますが、その言葉が編み出されていった文脈みたいなものが、まとめていけばいくほどうまく表現できているかと不安に感じています。この後の議論において、言葉が生み出された背景も含めて、どういう風に表現するのか、ぜひ、思いの丈を市民委員のみなさんに述べていただければと思っております。

また、定住外国人の方々の住みやすさをどうするのかというご意見が、たびたび出てきておりました。資料第1号にも記載されておりますが、念押しとして補足させていただきます。

（部会長）

有識・議員部会には私が議論に参加させていただきましたが、まず、ブレインストーミン

グのようにみんなでたくさん意見を出し合い、それを事務局の方でまとめていただき、まとめを最終的に部会で確認したという感じです。

また、それぞれの部会で出た意見のまとめをどのように総合計画に落とし込んでいくかについても議論ができればと思います。

それでは、意見交換させていただきますが、学識経験者の方々は、各部会の検討結果を初めて聞いていただくかと思いますので、そのあたりご質問や、あるいはご自身なりに感じる「尼崎らしさ」が十分かけていないのではないかと、これは違うのではなど、修正やご意見がございましたらお出しただければと思います。

先ほど申し上げましたとおり、各部会の検討結果をどのような形で総合計画につないでいくかが重要な議論かと思しますので、とりあえず次の議題に移らせていただいて、あわせて議論できればと思います。

それでは、事務局から説明をお願いいたします。

3. 有識・議員部会及び市民部会の検討結果を踏まえたまちづくり構想コンセプト等について

(事務局)

<資料第2号「第6次尼崎市総合計画まちづくり構想コンセプト等」(以下「資料第2号」という。)>に基づき説明。

(部会長)

ありがとうございます。まだ、たたきのたたきの段階でございますので、内容のところまでは踏み込めておりませんが、できるだけ早い段階でご意見をうかがいたいと、まとまってない段階でお示ししております。事務局からの説明にもありますように、大きくは「ありたいまち」を「ひと咲き まち咲き あまがさき」にしたいという提案がありました。次に、「尼崎らしさ」を表現する部分として5つの分野で文章化に持っていきたいというようなことでございました。

まず「ありたいまち」を新たに作るのではなくて、もうすでに使っている「ひと咲き まち咲き あまがさき」を「ありたいまち」に位置づけ直したいということが事務局の思いとなっております。今まで4つの「ありたいまち」を、「ひと咲き まち咲き あまがさき」ということでかなり抽象度の高い言い回しになっておりますが、なにかご質問やご意見はございますでしょうか。

(委員)

「ひと咲き まち咲き あまがさき」がどうということではないですが、例えば「ありたいまち」の将来像について、市民アンケートなどを活用しながら作り上げていくとか、自分たちで決めたい方が、共感度が高くなるような気がするのではないかと個人的に思いました。

(部会長)

ご提案がございましたがいかがでしょうか。

私の経験から言いますと、広く聞けば聞くほど分散してしまっていて、なかなかまとめるのも難しくなると思います。方向性としては理解できますが、それもまた、事務局でまとめることになってしまうと本当にたくさんの人の意見が反映されたものかどうかとも悩ましくなるのではないかと個人的には思っているところです。「ひと咲き まち咲き あまがさき」についても事務局が作ったのではなく、現総合計画を作った際にはキャッチフレーズを付けずにいましたが、内容をみていただいて、まちづくりのキャッチフレーズを公募し、その中から人気投票等を経て「ひと咲き まち咲き あまがさき」が選ばれているので、そういう意味では、市民の思いからスタートした言葉でもあるかなと、現総合計画と一緒に作らせていただいた立場で少し補足説明させていただいたということでございます。

他に「ありたいまち」に関して何かご意見やご質問はございますでしょうか。

(委員)

ありがとうございます。ご提案いただいている「ひと咲き まち咲き あまがさき」は市民意識調査の結果をみても市民からの認知度が高いとされていますし、それからいい意味で色んなものを抽象的に含んでいるので、今後どのような形にするにしても、「ひと咲き まち咲き あまがさき」を将来像として描くということは受け入れやすいのではないかと思います。リズムもよく、将来像を「ひと咲き まち咲き あまがさき」とすることについてはあまり問題ないように思います。

(部会長)

他、ご意見はいかがでしょうか。

(委員)

事前にも少しお伝えしたところがありますが、実は、私はこの提案にはあまり賛同できないと思いながら聞いているところがあります。先ほど部会長からもこの「ひと咲き まち咲き あまがさき」が作り出された経緯のご説明がありましたが、もともとキャッチフレーズとしてつけられ、市民等にも浸透しており、先ほど委員からもありましたように、リズムもあって、浸透しやすいというようにキャッチフレーズとしては優れていると思います。しかしながら、10年後の尼崎のイメージ、都市のイメージを指示しているとは言えないというか、これだけでは難しく感じます。これと何かセットであればいいんですが、具体的にどんなまちになるんだというのが思い浮かばないので、その言葉を聞くとそれだったらこんな感じになりそう、というもう1つ具体像を想起させるようなものが合わさらない限りは、どこまで行ってもキャッチコピーに留まるのではないかと思います。逆に言ったら10年後でも20年後でも30年後でも40年後でも使えるような言葉だと思います。大切な芯に置いておくにはいいのですが、これが10年後の「ありたいまち」といわれてしまうと、最終的にどういう状態なのかイメージが沸かないのではないかと思いますので、この言葉がだめということではなくて、この言葉だけでは、「まちづくり構想」が指し示すまちの将来像とするにはあまりにも抽象度が高すぎるのではないかと考えております。

(部会長)

本日は色々ご意見を賜り、それを参考に事務局も文章化していただけたらと思いますので、思いの丈を自由に語っていただければと思いますが、他にご意見はございますか。

(委員)

キャッチフレーズとして優れているが、具体性があまりなくて普遍的すぎるという委員のご指摘は本当にその通りだと思うので、どういう形で示すかということをお教えいただきたいところがございます。

先ほど事務局から、「ありたいまち」の実現のための手段や姿勢として2パターンを示していただきました。そこにも関係してくるかもしれないですが、「ありたいまち」の将来像をどのレベルで考えているのかお教えいただきたいです。

(部会長)

事務局から補足説明ありましたらお願いします。

(事務局)

「ひと咲き まち咲き あまがさき」という言葉だけではイメージしにくいという先ほどの委員のご意見をいただきましたが、例えば、現総合計画の見開きページには「ひと咲き まち咲き あまがさき」の言葉に込められた意味が掲載されています(現総合計画見開きページ“ひと咲き まち咲き あまがさき”説明文参照)。こういったように「ひと咲き まち咲き あまがさき」というのが示す状況であるとか状態であるとかそういったものを考えておきまして、事務局としては、各部会を出していただいた「尼崎らしさ」をちりばめながらこの「ひと咲き まち咲き あまがさき」を説明できれば、みなさまにもまちの将来像としてイメージしていただけるのではないかと考えております。そういう意味では「尼崎らしさ」を使ってこの言葉を説明していくのが、次の専門部会で提示できればなと考えております。

(委員)

この現総合計画の見開きにある言葉は市制100周年目掛けてこれから100年こんなまちにしていきたいですという決意表明みたいなものだと思います。現総合計画では、「まちづくり構想」を定め、そこが示す方向性で次の10年で目指すのは4つの「ありたいまち」だとあって、その4つの「ありたいまち」の説明が書いてあるのが今の立てつけになっているかと思っておりますので、今回の提案というのはこの立てつけをかなり変えるという話だと思います。現総合計画の見開きにある決意表明のようなものを格上げというか、全面展開しようというご提案だと思います。それを審議会でそのような方向で現総合計画からの「まちづくり構想」の立てつけを変更するのであればその形を我々が決めなければならないのではないのでしょうか。委員の質問に対して答えるのであれば我々がどういうものを「まちづくり構想」とするのかを決めないといけないと思います。

(部会長)

お二人の委員のお話しは違うような話に見えるけど、じつは共通している部分があって「ひと咲き まち咲き あまがさき」を冠として掲げるというのはいいが、ただ、これを「ありた

いまち」あるいは将来像とするには少し違うのではないかというのが委員のご意見だと思います。

次に展開している5つの「尼崎らしさ」があり、これも今はそれぞれ単語だけですが、ここに、こんなまちとかこんなまちを目指そうというような文章が加えられると思うので、「ありたいまち」を将来像と読み替えて、その上に「ひと咲き まち咲き あまがさき」という大きな冠をのせていくのであれば、現総合計画の4つの「ありたいまち」が5つになると考えればそれもありになる。あるいは「ひと咲き まち咲き あまがさき」と5つの「尼崎らしさ」の間に何か方向性を指し示す将来像を挟み込むという方法もあるし、そこは色んなやり方があるのかなと今の話をききながら思ったところです。

(委員)

冠はシンプルで分かりやすいものの方がいいかと思っています。より多くの市民に分かってもらえるということが大事かなと思うので、最初に難しい言葉が来るとそれを見た途端に見るのをやめてしまおうかという方も結構多いと思います。

ある意味、ひとが咲く、まちが咲くというのはどこでも当たり前のことですが、その後に「あまがさき」と言えるのは尼崎だけですので、関西っぽく、庶民っぽくて尼崎らしいなと思ったので、ああそうかというのを冠に挙げて、具体的に何かというと、4つか5つの柱で表すと市民の方にとっても入りやすいかなと思いました。

そういう視点で私は「ひと咲き まち咲き あまがさき」はいいと思いました。

(部会長)

一度、「ひと咲き まち咲き あまがさき」を冠にさせていただいて、次の5つの「尼崎らしさ」をどのような形で示せるのかによって、全体を見ながら間に挟むものが必要なのか、あるいは5つの「尼崎らしさ」を柱として将来の方向性を示すという形で「ひと咲き まち咲き あまがさき」とセットになって将来像として示すということで理解できるのか。そのあたりはまた次回の専門部会までにもう少し進めてから議論いただくということでもよろしいでしょうか。

それではさきほどの話の5つの「尼崎らしさ」、①「産業・挑戦・活力」、②「多様性・包容力」、③「住みやすさ・くらしやすさ」、④「誇り」、⑤「持続可能性」ということで、これらを柱のキーワードとしながら具体的に尼崎らしく将来を見据えるような方向性を示した文章化をしたいというのが今の事務局の思いですがいかがでしょうか。

何かご質問やご意見はございますか。

(委員)

さきほど事務局から説明のあった将来像のコンセプトのところ、資料第2号にある「将来像を含めたまちづくり構想のコンセプトとして」として、『「持続可能」で「シチズンシップ」と「シビックプライド」が』とありますが、有識・議員部会でこのような意見が出たとご説明にありましたが、そのような意見が出ましたでしょうか。

(事務局)

「あまっこのプライド」といった部分につきましては有識・議員部会からいただいたもの

で、「シビックプライド」ですとか「シチズンシップ」みたいなところは全体を通して事務局で追加したものでございます。

(委員)

有識・議員部会では、「シチズンシップ」や「シビックプライド」の言葉としては出なかったと思います。

「シチズンシップ」という言葉は、福祉の学会でも、ここ20年程結構難しい議論となっております。特に難民とか労働力がどんどん外国から入ってきているときに、どのように「シチズンシップ」を考えるかすごく難しい言葉になってきています。少なくとも有識・議員部会ではあまり使わなかった言葉なので、「シチズンシップ」という言葉を定義せずに使うのが難しいなと思いました。同じく「シビックプライド」についても「市民の誇り」とどう違うのかとなりますので、有識・議員部会ではあまりでてこなかった言葉なので、使うのであれば、どういう定義で使っているのか考えていただきたいなと思います。

それから先ほど部会長がおっしゃったカテゴライズについては、「尼崎らしさ」というアプローチでとらえられていますが、実は「尼崎らしさ」とは少なくとも3つぐらいレベルがあり、1つは県民性とか国民性とかいう意味合いで使われる「市民特性」で人にフォーカスした考え方、次に行政である市のイメージ、そして歴史的・文化的な総体と、かなり広くアイデンティティを、時代を越えて、あるいは今の行政府を越えた総体としてという考え方があり、「尼崎らしさ」とはいろんな文脈で使われているので、「尼崎らしさ」というくくりで5つを柱としたときに結局市民個人なのか、いくつかの集団なのか、市なのかということで「尼崎らしさ」というのは使いやすけれどもマジックワードで、何を対象にしているのかというのが難しいなと感じており、議論するのに最初に「尼崎らしさ」をもってきて、ここから議論していき、だんだん皆さんの意見を積み上げてきたというのはわかるんですが、最後に「尼崎らしさ」を持ってきたところで誰について、何についての「尼崎らしさ」なのか結構混同してしまいますので、「らしさ」の使い方は注意すべきかと思いました。事務局からご説明頂いた言葉について、もう少し吟味なり、説明なり、必要かと思った次第です。

(部会長)

根本的な問いかけをして頂いたのかなと思っております。私も有識・議員部会に入っていますが、「シチズンシップ」や「シビックプライド」という言葉は直接的には言ってないと思います。先ほど事務局からもあったように、具体的には委員が尼崎市出身ということで、同級生や友達の話をしているなかで「あまっこ」という言葉がでてくるので、このあたりを活かせないだろうかというご提案があり、事務局としてもいい言葉なのでどこかに使いたいなと思ったが、なかなか納まるころが無いのでそれを言い換えると「シビックプライド」になるのではないかということで、それをもって有識・議員部会で議論をされたとこういう説明だったのかなと思います。

また、「尼崎らしさ」を定義することが必要ではないかのご指摘いただきました。ここがぶれてしまうと今後の議論もぶれてしまいますので、ここは改めて、しっかりと議論して共有しておいたほうがいいのかと思いますが、いかがでしょうか。

先ほど委員から根本的な問いかけがございましたし、5つの「尼崎らしさ」の柱はこれでいいのか、これからその「尼崎らしさ」を文章化するときどのようなことに留意すれば「尼

「崎らしさ」を表現できるのかなど、色々な観点がございまして、どのような切り口でも結構ですのでご意見はいかがでしょうか。

(委員)

「尼崎らしさ」についてですが、資料の第1号にもあるように、歴史的背景を見ると有識・議員部会のところで、「人々が力を合わせる」、有識・議員部会意見を踏まえた将来像として、「つながり、支えあえるまち」、また市民部会において「尼崎らしさ」を踏まえた将来像として「たすけあって生きるまち」というのがあります。その辺を考えるとその「尼崎らしさ」のところで、事務局が作って頂いたキーワードのところにも「支え合い」というのがありますが、福祉的な視点も含めてですけど、「多様性」「包容力」と併せて「支え合い」や「協力」などの言葉が入ればいいのかと感じました。

また、資料第1号に「誰もがまちの一員になれるまち」、「生きがいとやりがいを実感でき、居心地の良いまち」「居場所があるまち」が出てきますので、そのあたりを踏まえ福祉的な視点を考えると先ほど申し上げたように「社会参加」「役割」「居場所」などを想起させる言葉が「尼崎らしさ」に入ってきたらいいのではないかなと思いました。

(委員)

「尼崎らしさ」の中で言葉を見て思ったのが、今後10年というところの、将来的な感覚が弱いのかなと感じています。例えば「産業」とは、その環境なのか、それを越える何かなのか、「挑戦」にしても何についての挑戦なのか、教育なのか何なのか、向こう10年のイメージするようなところの観点みたいなものが含まれると物凄くわかりやすいんじゃないかなという気がしました。

(部会長)

ありがとうございます。これから文章化をしていくときの何かヒントやアイデアを頂けたのかなと思っております。おそらく分野を指し示す言葉とすればどこの市でも同じような分野のキーワードとなってくるかと思いますが、そこから尼崎らしい展開をするときにどういう内容、どういう書きぶりで進めていけばいいのかということ議論したら見えてくるのではないかと思います。事務局と事前に打ち合わせする中で、阪神南3市の西宮と芦屋、そして尼崎を比較するとそれぞれの分野において、進んでいく方向や特徴というのが違ってきますので、他市と比較すると尼崎はどういう「らしい」文章ができるのか方向性を指し示されるのか、事務局も他市をターゲットとしてイメージにしながら文章化していただくと、尼崎らしい文章が書けると思います。

(委員)

今の話を通して思っていたのが「ひと咲き まち咲き あまがさき」というキャッチコピーが冠にあって、それは多分100年後でもずっとこうしてわかりやすいコンセプトみたいなことで、「尼崎らしさ」として共有しやすいのが理想の一つですが、現状として他市と比べてもイメージが悪いというのは共通認識としても間違いなくあると思います。尼崎に住んでいるってあまり言いたくないところがあって、周りでも塚口に住んでいる、武庫之荘に住んでいるとは聞きますが、「あま」に住んでいるというイメージが悪くて、ガラが悪いところに

住んでいるなとなりますが、「尼崎らしさ」を各部会とかでも出していただいて、個人個人としては人としての良い部分であったり、まちなかでも実は良いところがたくさんあって、そこをしっかりと誇りを持っていくというようなところが早急に実現することを、10年という長いようで短い区切りの中では、トップに持ってきていいのではないかなと思っています。誇りを持つために産業をもう一度活性化するとか、多様性や包容力があるということをやんとみんなで再認識していこうということだったり、住みやすいまちということが共通認識としてあれば、堂々と主張できるのであれば誇りをもって「尼崎は住みやすいから住んでるねん」と言えるまちというのは、市民感覚としては1番わかりやすく感じます。産業などの分野に限ってしまうと、いち市民としては共有しにくいところがあるので、一人ひとりが自分の好きな尼崎をしっかりと再認識して、市としてある程度明確に共有できるビジョンを作ってみんなが誇りをもって「あまに住んでます。」「尼崎市民です」といえるようなまちに今後10年で、まず尼崎にいる人達のイメージアップができれば、あとは今は個人で情報を発信していく時代なので、自然と対外的なイメージアップにもつながっていくのではないかなと思います。イメージが悪いのはすごくもったいなくて、やっぱりわかりやすく課題であると思うし認識次第で10年あればそこはひっくりかえせるのではないかなというのが意見です。

(部会長)

ありがとうございます。先ほど委員から歴史や文化というようなお話がありましたが、有識・議員部会では歴史博物館から辻川さんに来ていただき、しっかりと歴史を勉強させてもらいました。それはいくつかの観点・視点があるなと思いお願いしたのですが、一つは先ほど委員がおっしゃった自虐的なイメージや対外的なイメージは昔からだったのかということを変更して確認しておかなければ、尼崎はずっとそういうまちなんだという錯覚に陥ってしまうのではないかと考え、歴史的経緯をしっかりと共有しておきたいなという想いがありました。

それともう一つは、先ほどの委員の話にも関わりますが、歴史のストックというのはすごく重いのでなかなか変えようとしても変えられないし、逆にそういうしっかりとしたストックを将来に活かした方が尼崎らしいということもあるので、一体昔の尼崎というのはどういうストックを蓄積してきたのかということもしっかりと共有しておきたいなということです。

個人的な意見で言わせていただくと、恐らく尼崎のイメージが悪くなったのは工業で公害が叫ばれた以降ではないかなと思っています。少なくとも戦前までは、工業が日本社会全体を引っ張っていたので、その工業の先進地である尼崎は周りから悪く言われるどころか、工業の先進地として取り上げられていたのではないかなと思っています。ところがその工業のイメージが悪くなり、それに伴って尼崎のイメージも悪くなってきたというようなストーリーとあるのかなと思うので、では、それを先ほどもご意見いただいたようにどのような方向性で、今度は新しい尼崎のイメージの方向性を指し示していけるのかという議論をみなさまの意見などを承りながらやっていけたらなと思っている次第です。

(委員)

ご意見をうかがって、「誇り」というのがこういう意味なのかとストーンと落ちたと感じがしています。1つ目の意見としては、勝手な意見かもしれませんが、むしろ「誇りをもって尼崎らしさを」くらい強調したらいいのかなと思いました。

2つ目は、「産業・挑戦・活力」、それから「住みやすさ・くらしやすさ」がありますが、これは分野を説明しているように感じており、「多様性」「包容力」は少し分野とは異なり、「誇り」「持続可能性」と同じように全体を横断している言葉かなという感じがしたので、「多様性」「包容力」の代わりに何を持ってきたらいいのかと考えると、例えば人を育てるとか、教育福祉というところにもあるので自分自身も成長する人に思いやりを持つという意味では「人を育てる」というような言葉があってもいいのかなと思った次第です。

(部会長)

ありがとうございます。先ほど委員がおっしゃったようにここを書くにはこういう観点じゃないかというようなアドバイス、アイディア的なご意見もどんどん出していただければ事務局としては作文作業が助かると思いますので、そこにブレイクダウンしていただいても結構かと思います。

(委員)

先ほど申し上げたことがちょっと伝わってなかったようなのでもう一回申し上げます。

先ほど申し上げたのは「尼崎らしさ」というのがいくつかのレベルで捉えられるだろうと、人であったり、自治体単位であったり、あるいは歴史・文化的な総単位であったり、この3つが良いかどうかは別としていくつかのレベルで「尼崎らしさ」というのが捉えられるので、それを混同した使い方で「尼崎らしさ」というのではなくて、ここで言ってる「尼崎らしさ」は誰を単位に、何を単位にして述べているんだということが見えたほうがいいのではないかという提案でした。

次に、社会福祉協議会の理事長として言わせていただくと、尼崎の社会的、経済的、社会階層的な特徴で言うと、やはり生活保護の受給者が県下でも多く、コロナの影響で収入が減少した世帯に対する「緊急小口資金」の貸し付けについても、県下の緊急小口資金のうち1割が尼崎です。そこからわかるように生活困窮である方が多いということになります。また、虐待を中心とした児童福祉の問題が多いです。西宮市に兵庫県のこども家庭支援センターがありますが、尼崎市にも本市域を所管とする兵庫県の児童相談所が開設されます。また、約3年後には、中核市等への児童相談所設置に向けた国の動きがあるという状況です。そういう意味では社会的な排除、孤立というようなことで、生きにくさ、生活苦を抱えている方が大変多いというのが尼崎の社会経済的、あるいは福祉的な状況です。それにも関わらず、それでも住みやすい、生きづらさを少しでも緩和してくれる、それが尼崎であるし、一層そういうまちでありたいという風に思っています。そういう意味ではキーワードの1つとしてレジリエンスのような言葉があるかと思います。「めげない人」そしてSDGsにもあるように「誰も取り残さない」まち、それが「尼崎らしさ」の一つの特徴であったり、将来像であると思います。現在もそうですけど、今後一層コロナの影響を受け、そして高齢者が増えていくというのが年金生活で所得も減っていきます。とりわけ女性の高齢者の貧困というのも大きくなっていきます。そしてここ10数年の一般の国民の給料も減っています。コロナ禍で益々階層の分化、あるいはとりわけ階層の下降移動が増えてくるかと思うんですね。そういう時代に総合計画を打ち出すわけですから、そういう事態になっても住みやすいまち、そういうまちであったけれども、尼崎はそれにも耐えられる人達とまちなんだというのが1つ大きな特徴かと思います。もっとも総合計画はどのまちでも夢を語ります。暗いことは言わないで

すけども、この時代そういうレジリエンスであったりめげないとか誰も取り残さないというのが1つの大きな強みだと思うので、これを何らかの形で総合計画の中に活かしていくことが尼崎の総合計画としての大きな特徴になるのではないかというのが先ほどの部会長からのお問い合わせに対する答えでございます。

(部会長)

ありがとうございます。先ほど委員から「多様性」「包容力」の中にもう一つ「協力」や「支え合い」を入れたらどうかとご提案いただいて、今の委員のお話を受けて言うと、どんな立場境遇になったとしても尼崎の中に暮らし続けられる色々な方々がおられるという「多様性」とそれをまち社会が受け入れてもらえるというような「包容力」、さらにはその方々をみんな支え合っていこうよというような方向性、この辺りでキーワードを並べて文章化していけば真ん中のあたりが尼崎らしい文章ができるのではないかという風な思いになったので事務局の方も参考にしていただきながら文章書いていただければと思います。

(委員)

私も専門の視点からコメントをさせていただきたいと思うんですけど、まちづくりの方向性が5つあって、うまくまとめられてるとは思うんですけど、言葉尻をとらえるようになってしまうんですけど、「産業・挑戦・活力」という表現は他のところと文言の姿が違うなという印象があるんですね。産業というのは門切型で「挑戦・活力」というのは動きを示してると思うんですけど、他のところもどちらかという動きを示す力言葉で表現されていると思うんです。更に言いますと、「尼崎らしさ」というのは色々あると思うんですけど、やはり産業ビジネスの力が私はもっともわかりやすいのではないかなと思うんです。意図的にそこを避けてるのではないかとすら私には見えるんですね。例えば西宮の総合計画に私も実は一部ですけどもお手伝い参加させていただいたんですが、西宮の特に市民の皆さんはもう産業なんかはほとんど眼中に無くて、文教というところにすべての議論を集中させて、私はその経済の担当としてお手伝いしましたけども、ほとんど経済はどこかにすっ飛んでしまったイメージがありました。それはしかしやはり市民の皆さんのまちの「らしさ」をそこで表現されたと思うんですね。尼崎の場合、もう少し産業経済的なところを表に出してほしいなど。先ほどの言葉の表現のところで言いますと「挑戦・活力」というのは私なんかの専門家で見ると実をいうとありとあらゆる全てのところに「挑戦・活力」というのは実は埋め込まれており、それが都市の魅力につながってると思うんですね。そういう意味では「産業・挑戦・活力」のところは、表現の仕方は事務局のセンスにお任せしたいけれども、例えば「産業のダイナミズム」ということにして、「挑戦・活力」というのは「ひと咲き まち咲き あまがさき」という先ほど議論がありましたけども、非常に象徴的なものとのこの5つ「尼崎らしさ」を結びつける部分とベースになる言葉として使ってもいいのではないかなと、最近の言葉で言うと「挑戦・活力」というのはいかにもこうパワーみなぎるイメージがあるので、例えば創造力とかですね、そういうような言葉でもいいのかな。あるいは先ほど福祉的な領域から色々なキーワードが出てきましたけども、レジリエンスなんかもその一つかと思えますけども。そういうようなものが「ひと咲き まち咲き あまがさき」とこの5つを結びつけるようなイメージ、あるいはこの5つのベースにある言葉として使われるというのも一つのやり方かなという気がしました。以上です。

(部会長)

ありがとうございます。私も西宮、芦屋市の仕事もさせていただいて、委員のおっしゃることには非常に共感しております、産業をぐっと表に出せるというのはそれ自身も尼崎の特徴ではないかなと思います。

また、挑戦・活力については、産業だけでなく、例えば、暮らしにも、安心して暮らせる部分と、生き活きと暮らすという部分もあるので、挑戦・活力に当てはまるのではないかと思います。そのあたり、どういうところにどういう言い回しをするのかというのもまた参考にいただければなと思っております。

(委員)

市民特性を考えた時に、住みやすさ・暮らしやすさ、人情味とかいう意味で人を集めるという特性、人を集める魅力が尼崎にはなくてはならないと思います。今あるかどうかわかりませんが、若い世代が尼崎に住んで子育てを終えて小さな子どもたちを育てて、その子どもたちが小学校・中学校・高等学校に行くと思います。市立の高等学校には尼崎市内より市外から多く入ってきている生徒が多いという情報もあります。そういう意味で、人を集めるという特性、人を集める魅力がある、そういうのをキーワードにして「尼崎らしさ」に入れると、よりこら辺のキーワードがまとまりやすくなるのではないかなと思います。

(委員)

まずこれだけ具体性の薄い漠然としたなかでここまで仕上げていただきましたみなさんにまずはお礼を申し上げます。

尼崎の特徴というのは文教ではないとおっしゃっているように、やっぱり産業と生活が一緒にある、産業のなかでも商業だけでなく工業もあり、あまり西宮や芦屋に無いもののごちゃ混ぜになっているなかで存在する尼崎のイメージがあります。その中で、住みやすいまち、住みたいまちと西宮や芦屋のようにそこだけを目指されてしまうと私たち産業、商業、工業で生きている人間は今後どうしたらいいのかとなりますので、尼崎のビジョンという部分で言うと人情や人については産業に下支えをされた賑やかな活気に培われている“尼崎人”というイメージがありますので、そこをつみ残してほしくないなとお願いしたいなと思います。

また、表現の順番ですが、「ひと咲き まち咲き あまがさき」をどうされるのかは別にしまして、一つのキャッチコピーとして使おうとされる場合に、この資料の中にある5つのカテゴリーですが、1番最初の上段に「産業・挑戦・活力」がきていますが、「ひと咲き まち咲き あまがさき」で言えば「まち咲き」にあたると思うので、「ひと咲き」に当てはまる「多様性・包容力」を上にもってきて、真ん中に「産業・挑戦・活力」、一番最後の「あまがさき」に当てはまる部分に「住みやすさ・くらしやすさ」をもってくるほうが面白いのかなと思いました。

(委員)

「尼崎らしさ」について、今5つ挙げていただいています。カテゴリーの種類が違うのではないかなという印象がありました。色々お話を聞いて、「産業・挑戦・活力」は経済、「住みやすさ・くらしやすさ」は生活とか暮らしというところだと思います。尼崎はこの2つが分かれているのではなくて、一緒になっているということ踏まえた上で、「経済」と「暮

らし」という2つの場面であり、そこでまちづくりを考えていくときに尼崎の特性である「多様性・包容力」はそういう場面を目指す時に使っていく「尼崎らしさ」ではないかなと思いました。そして、そういうまちづくりをしていった時に、結果として得られるものが「誇り」であり、「持続可能性」ではないかなと思うので、「尼崎らしさ」という5つのカテゴリーを並べるのではなくて、もう少しダイナミックにといいますか、「尼崎らしさ」を実現するためにこれを使うとか、目指すのはこれだという風に並べていったらいいのかなと思いました。

(部会長)

全体のストーリーとかそれぞれの関係性みたいなものをもう少しきちっとみていけば展開が見えてくるというお話かなと思いました。

(委員)

今の委員の話と重なる部分がありますが、私も「尼崎らしさ」というところで、住工混在というのも大事なところだと思うので、今の「ありたいまち」というのをキーワードから作っていくとそういうものが落ちたりしないかなと気になったのが一つです。

次に、産業や多様性、住みやすさというところと、その結果得られる誇りとか持続可能性というところですが、私が思ったのは「誇り」には、「あまっこのプライド」とか書いてあるように自虐的な部分とプライドがある部分があると思うので、今もすでに「誇り」があるとしたら、「産業・活力・挑戦」、「多様性・包容力」、「住みやすさ・くらしやすさ」と「誇り」は並ぶのかもしれないと思いました。

また、「持続可能性」というのはこういう「ありたいまち」をどう持続していくのかというところですが、各種役割を持つことで持続していくのではないかと考え、次のこういうまちをどう維持していくのかという次のステップでの話なのかなと思いました。

(部会長)

さきほど委員が、活力・挑戦は産業だけでないとおっしゃたことと、今の委員のお話は重なってくると思いますが、分野として捉えると、つながりが消えてしまうので、分野ごとではなく、色んな問題が混じり合っている尼崎をどう表現していくのかということだと思います。

(委員)

みなさんの話をきいていて、それぞれ納得かなと思いますが、改めて言葉を見直したときに、市民が「ジブンゴト」にできるのかなと思いました。一市民が誇りを持つ、産業に関わっている人は産業に関する誇りを持つというような書き方のほうが分かりやすいかなと思いました。今の言葉が羅列されているものを見ても、「ジブンゴト」にしづらいいかなと思うので、一人ひとりに浸透しやすい、納得感があつたらいいのかなと思います。

(部会長)

色々な宿題を事務局に投げかけられているので、事務局は頭を悩ますかもしれませんが、よろしく願いいたします。

(委員)

委員からレジリエンスという言葉がたびたびでていますが、レジリエンスとは、尼崎らしさに関わってくる産業・挑戦・活力、多様性・包容力というところに非常に関わってくる一見するとポジティブな言葉ですが、見方によっては、回復や立ち直りに至るまでの困難や負担、我慢などを連想させてしまうのではないかと個人的には思っています。そうすると、分かりの良い市民にとっては、これ以上、困難や負担を突き付けるのかと捉えられる可能性もあるのかなと感じています。

「尼崎らしさ」に結びつけるような柔軟性、フレキシビリティや責任、リライアビリティなど全面的にポジティブに捉えられる言葉を「尼崎らしさ」に結び付けるのはどうかなと思います。

(部会長)

私の学部には心理学の先生もいますが、心理学のなかでもレジリエンスがとても重要になってきていると言います。このストレスが多い社会の中でも生きていける心のレジリエンスを持つという話になっている。

どんな状況になってももう一度立ち直れるんだと、一人の責任ではなくて、みんなで立ち直るんだというレジリエンスだとすると、プラスに捉えられるのかなと思います。

「布施落ち、尼落ち」という言葉がありますが、大阪市内で商売に失敗した人が東にいったら布施、西に行ったら尼崎に行くことを表しています。負けているのではなく、布施や尼崎でもう一度しっかりと基盤を建て直して商売を続けていくんだというプラス思考での言葉だとしたときに、失敗したときの受け皿として、商業としての包容力も尼崎は持っていたのではないかと思います。それがあある意味、産業のレジリエンスかもしれない。ポジティブ思考の言葉を説明文に入れながら尼崎の包容力をうまく表現すればいいのかなと思います。

(委員)

包容力・多様性がベースとして、もともとある尼崎らしさで、そのベースがあるからこそ、産業も発達したし、失敗しても再挑戦できる空気感があってそこから活力が生まれ、その結果経済も回るし、包容力に基づく住みやすさ・暮らしやすさにつながっているのかなと思いました。その3層構造みたいなのがしっかり認識できれば誇りに、それがうまく循環していけば自然と持続可能性につながっていくというストーリーがあるのではないかなと思いました。

また、この「尼崎らしさ」の言葉のなかで、住みやすさ・暮らしやすさという言葉は個人レベルの話だと思いました。この条件があれば全員が住みやすい、暮らしやすいってことではないので、人によっては、お金がなくても挑戦できる環境が住みやすさかもしれないし、安定して福祉が充実していて子どもが伸び伸びと育つ環境があるのが住みやすさかもしれません。この辺りは個人レベルになるので、定義が一つには決められないので、そこにも多様性があって、いろんなものを内包できるのが尼崎らしさなのかなと思いました。市民性とかまち全体としての産業とはカテゴリーが違うので、表現に工夫が必要だと思います。

最後に、市民レベルで共有してほしいというのであれば、SDGsのように小学生でも理解できるような教材をつくるなど、関心が低い人や意識が低い人にも届けられるように考えなければならぬと思いました。

(部会長)

同じ概念を語りながら、分かりやすい言葉で語りかけていくということを提案いただいたのかと思います。

(委員)

尼崎が持たれているイメージの悪さや産業に関するご意見もでていますが、歴史博物館を見学した際に思いましたが、近隣市と比較して尼崎のここ半世紀の発展はすごいと思います。公害問題から、企業と一緒にきれいになってきれいな尼崎をつくろうと、二酸化炭素の排出をおさえたりして、この50年間で圧倒的にきれいになったのが尼崎だと思います。

もう一つは、非行や犯罪件数について、教育委員会やいろいろな団体が力を合わせて非常に少ない件数にまで抑え込めるまでになったことも含め、尼崎は、今もいい方向に走っている最中だと思います。50年前に西宮や芦屋などが都市づくりを0からはじめたのであれば、尼崎はマイナス30くらいからはじめていて、今も加速してきているので、産業、企業、市民が一緒になって人々の快適な暮らしを求めていく、尼崎が見本になってこれからの美しい未来づくりに貢献していくという言葉が入ればいいのかと思います。

(部会長)

有識・議員部会において、歴史博物館の辻川さんの話をきいていると、戦前は労働者や農民運動であったり、働く人が自ら環境を変えようとがんばってきたという歴史があるので、公害問題についても同じかなと思います。その辺りをうまくキャッチフレーズにできればいいかなと思いました。

(委員)

私が一番感じている「尼崎らしさ」は何か考えると、行政と市民が一緒になって何かひとつ課題解決に向けて動いていくところが、特にこの5年で尼崎が近隣都市に対して誇れるところじゃないかなと思います。そういうところがここからは読み取れないので、どういう言葉がいいのか、柔軟性なのか、繋がりという言葉はキーワードでできますが、他市で、「尼崎っておもしろいよ」というのがわかる言葉があればいいかなと思います。

(部会長)

シチズンシップという言葉もなかなか難しいので、どういう言葉に置き換えていくかは考えていかなければならないと思いますが、みんなで力を合わせて社会問題や地域問題に取り組んでいくという土壌はこの5年間しっかりと作り上げてきているし、今の市長の方向性もそこにあるんじゃないかなと思うので、そこは大事にしながら言葉を紡いでいければと思います。

本日は、1回目の拡大専門部会ということでたくさんのアイデアをいただきました。この意見を踏まえ、作文をして、次回もう一回議論していきたいと思います。

以上